BOAT

作・演出：藤田貴大

ボートに乗って、ここではないどこかへ―

じっくりと関わりを積み重ねてきた、
藤田貴大と東京芸術劇場による待望の新作。
藤田自身の言葉、完全オリジナル作が登場。

東京芸術劇場に待望の新作書き下ろし

野田秀樹の初期作品『小指の思い出』（14年）、寺山修司の『書を捨てよ町へ出よう』（15年）、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』（16年）――。演劇史に刻まれた名だたる作家の言葉を、同時代性溢れる、これまでにない斬新かつ鮮やかな手つきで立ち上げた藤田貴大。そんな演劇界の次代を担う気鋭がついに、東京芸術劇場で書き下ろし新作を発表する。藤田は、「さらなる到達点を劇場と目指したい」と語る。

「東京芸術劇場での作品では、劇作家よりも演出家の部分をメインに据えて、実験的に空間を構成していくことを試してきました。既成戯曲をバラバラにコラージュし、劇場空間を形づくる。僕だけではなくて、テクニカルのチームも一緒になって“空間をつくること”を考え、成長してきた4年だったと思います。それで、一昨年の『ロミオとジュリエット』では『小指の思い出』で大きく感じたプレイハウスがむしろ小さく思えたんです。劇場との継続的なつきあいの中で共通言語も増えて来ましたし、そうした中で、自分の言葉でもこの空間でやれるんじゃないかと考え始めました」

寓話的な世界をかたちづくる「新しい言葉」

丘の上にある屋敷の三姉妹を描いた『カタチノチガウ』（15年～17年）、狂気をはらんだ少女が殺人を繰り返す『sheep sleep sharp』（17年）……新作『BOAT』は、マームとジプシーで発表されたこの2作品に連なる物語を構想しているという。生まれ育った北海道伊達市の記憶とランドスケープを繰り返し描いてきた藤田だが、この両作は、これまでとはまったく違う寓話的な世界と静かな狂気をまとい、「新しい言葉」が生み出された。

「ここ数年、自分の故郷をモチーフとした作品群からどう離れるかをずっと考えていましたし、自分としては、岸田國士戯曲賞受賞後の“新作”と呼べるのはこの2作品しかないと思っています。どこなのか、いつの時代かもわからない、けれども現在の空気を感じさせるような状況を、おとぎ話に映し出す試み。具体的に書くと限定されてしまうようなことも、フィクションだったら広範囲に手が届くんです。思えば『cocoon』（13年、15年再演）も、沖縄戦をモチーフにした物語でありつつ、日本ではないかもしれないし、未来の戦争かもしれないというつくりになっていましたよね。異化させていくような『小指の思い出』の言葉、『ロミオとジュリエット』の世界の影響も、自分の劇作に確実に影響を与えていると思っています」

AD：名久井直子　撮影：井上佐由紀

中嶋朋子、宮沢氷魚、青柳いづみ、豊田エリーが出演

そんな『BOAT』は、前2作と同じ土地を舞台とした、地続きの物語を構想している。一艘のボートが漂着して繁栄した「ある町」の上空が、ボートと呼ばれる飛行船で埋め尽くされる。それを脅威に思った人たちは、再びボートに乗って逃げ出す……。この静謐な伝承話のようなストーリーの登場人物を演じるのは、藤田自身「時間をかけて実現した、満足いくキャスティング」と力強く語る魅力的な顔ぶれだ。人々が出て行くことを決意する中、“残る事を選ぶ女性”を演じるのは、確かな演技を見せ、映像・舞台で活躍し続ける中嶋朋子。これが初舞台、意志あるまなざしが印象的な宮沢氷魚には、たとえば「カミュの『異邦人』のようなイメージもあって、その土地にとって“よそもの”であるという役割を演じてもらいたい」とか。繊細さと強靭さを持ち絶大な存在感を見せる青柳いづみ、『ロミオとジュリエット』ではまっすぐでしなやかな演技を見せた豊田エリーといった藤田作品経験者も加え、新たな布陣で新作に挑む。

今年の秋には『書を捨てよ町へ出よう』の再演、そしてパリ公演も決定しているが、そこには演劇人としての“思い”と“誇り”がのぞく。

「蜷川幸雄さんをはじめ、先人達が海外公演をやってきてくれたことを意識したいし、その仕事を引き継いでいきたいと思っている。僕くらいの年齢でも、プレイハウスのようなキャパシティの劇場でしっかり新作を発表していけることが、僕よりも下の世代にとって普通のことになっていってほしい」

その視線は、常に表現の未来をみつめる。演劇の“次”を目撃しに行こう。

取材・文：川添史子（演劇ライター）

7月16日（月・祝）～26日（木）プレイハウス

詳細はP10へ

作・演出：藤田貴大（マームとジプシー）
出演：宮沢氷魚 青柳いづみ 豊田エリー
川崎ゆり子 佐々木美奈 長谷川洋子
石井亮介 尾野島慎太朗 辻本達也
中島広隆 波佐谷聡 船津健太 山本直寛
中嶋朋子

特設サイト www.geigeki-fujita2018.com

藤田貴大

©篠山紀信

藤田貴大×東京芸術劇場　次回作

詳細はHPへ

RooTS シリーズ「書を捨てよ町へ出よう」
10月7日（日）～21日（日）シアターイースト
作：寺山修司
上演台本・演出：藤田貴大（マームとジプシー）
チケット発売：8月11日（土・祝）予定

NODA・MAP第22回公演

贋作 桜の森の満開の下

坂口安吾作品集より

作・演出：野田秀樹

最強カンパニーで新たに甦る、伝説的作品

今も多くのファンを持つ野田秀樹の代表作の一つが、今秋、NODA・MAP公演として甦る。パリでも上演される本作。期待はますます高まるばかりだ。

心に残る美しい場面を讃える演劇賞があったなら、私はきっと、この作品を推す。野田秀樹の『贋作 桜の森の満開の下』は、それほどまでに鮮烈な印象を残す作品だ。戯曲のベースにあるのは、野田が敬愛する作家・坂口安吾の短編小説『桜の森の満開の下』と『夜長姫と耳男』。そこに歴史観を含む様々な安吾作品のエッセンスと、野田ならではのふんだんな言葉遊びが盛り込まれ、ヒダの匠の弟子・耳男と、無邪気さと残虐さを持ち合わせた美しい夜長姫を軸とした“幻のヒダ王朝”をめぐる壮大な物語がめくるめく展開する。中でも桜の花びらが降りしきる終盤のシーンは、凄絶に美しい。桜の下の永遠の虚空に響く姫の台詞とともに、胸に深く刻まれる。

きっかけは、パリからの“逆指名”

そんな野田秀樹の代表作の一つが、NODA・MAPで甦るのだから、期待せずにはいられない。初演は1989年の劇団 夢の遊眠社による公演で、1992年に再演。2001年には新国立劇場の主催公演として上演されている。また2017年に八月納涼歌舞伎『野田版 桜の森の満開の下』として歌舞伎化もされたが、NODA・MAP公演として上演されるのは今回が初めて。芸劇との共催による東京芸術劇場プレイハウスでの公演のほかに、大阪、福岡公演があり、さらに今夏から来年にかけてフランスで展開される「ジャポニスム 2018：響きあう魂」の公式企画として、パリの国立シャイヨー劇場でも上演される。

実は今回の公演のきっかけは、そのパリの劇場から、「ジャポニスム」の公式企画として『贋作 桜の森～』を上演してほしいと“逆指名”されたことにある。野田がそう明かしたのは、都内で製作発表記者会見が開かれた今年4月のこと。その席で、野田が「せっかく日本を代表して上演するならと、考え得る限り最高のキャストとスタッフに当たって砕けろとオファーをし、これ以上ないカンパニーになった」と紹介した通り、実に魅力的な座組みが実現した。

ひらめきで奇跡的な出会いも実現

耳男役は妻夫木聡。自身の作品に出ている妻夫木を舞台袖から見ている時に、「彼が耳男をやるといいだろうな」と思いつき、自然と『贋作 桜の森～』のワンシーンが浮かんできたと、野田は話す。耳男を翻弄する夜長姫役は、2001年公演でも同役を演じた深津絵里。その深津とは今回が初共演となり、会見で深津が「この作品をやるためにこれまで共演しなかったんじゃないかと思うくらい、奇跡的な出会いのような気がしている」と語った天海祐希が、オオアマ役。深津と同様に17年前も同役を演じた古田新太がマナコ役、野田がヒダの王役で出演する。

ちなみにオオアマは、耳男、マナコとともにヒダの王に呼ばれ、姫たちのために仏像を彫るよう命じられる“男”。当初、野田はこれまでのように男性の俳優を想定していたそうだが、ふと天海が浮かび、すぐに連絡したという。天海はオファーを即快諾。これが宝塚歌劇団退団後、初の舞台での男役になることに、後から気づいたと笑顔で語っていた。

若い頃の自分と向き合い、新たな演出で再構築

ほかにも、秋山菜津子、大倉孝二、藤井隆、村岡希美、池田成志、銀粉蝶と、舞台巧者が勢揃い。早寝姫役でNODA・MAPに初参加する門脇麦にも注目だ。また、オーディションで応募総数約1,000人から選ばれた精鋭18名が、野田ワールドの立体化に欠かせないアンサンブルとして出演。既に行われているワークショップの感触も非常に良いらしい。

演出的には、若い頃の自分と向き合い、自身の中ではもはや“古典”となっている本作品を「ガラッと変えたい」と野田。日本独特の“見立て”を効果的に使うつもりだという。安吾の美学に貫かれた幻想的な伝奇世界と、かねてから“安吾の生まれ変わり”と公言していた野田の才能が融合し、平成元年に生まれた本作品。奇しくも平成最後の秋となる今秋、傑作はどう甦るだろう？ぜひ劇場で目撃したい。

文：岡崎 香（演劇ライター）

9月1日（土）～12日（水）／
11月3日（土・祝）～25日（日） プレイハウス

詳細はP13、HPへ

作・演出：野田秀樹
出演：妻夫木聡 深津絵里 天海祐希 古田新太
秋山菜津子 大倉孝二 藤井隆 村岡希美
門脇麦 池田成志 銀粉蝶 野田秀樹

パリ公演 ～ジャポニスム2018公式企画～
9月28日（金）～10月3日（水） 国立シャイヨー劇場 ※フランス語字幕あり

＊大阪、北九州公演あり

日本・フランス国際共同制作

カミーユ・ボワテル「MA―間」プロジェクト

リメディア～いま、ここで
©Vincent Beaume

フランス現代サーカスの鬼才、カミーユ・ボワテルが、ふたたび東京芸術劇場に戻ってくる!

世界が待ちわびる、カミーユの新作。日本とフランス、国際共同制作によるプロジェクトが進行中だ。今回は日本人アーティストやクリエーターも参加が予定されている。制作準備に余念がないカミーユに作品の構想を聞いた。

2014年に上演された『リメディア』では崩れ落ちるガラクタの山を這々(ほうほう)の体(てい)で逃げ延びる人物を、2016年に来日公演した『ヨブの話』では、この世のすべての不幸を背負いながら、なお神々しく輝く人物を描き出した。どこにも見たことがないような世界、それがカミーユ・ボワテルの世界。

孤軍奮闘の可笑しさが際立っていた前述の2作品と違い、今回の新作『MA―間』の主役はカミーユとセヴ・ベルナールの2人。愛し合う恋人たちの設定だが、カミーユの恋物語は一筋縄では行かない。

ヨブの話
©OLIVER CHAMBRIAL

不可能な愛の物語が、次々に短いシーンで現れる。役者とオブジェと舞台装置が、たん、たん、とリズミカルに現れては消える。重力や陰影やシチュエーションなど様々な要素が、手を変え、品を変え、形を変えながら二人を隔てる。「シーンの長さは色々でも、優劣はつけられない。短いシーンも、そこに至る照明効果や舞台装置の作りこみなど、膨大なエネルギーを注いでいるから」と、カミーユ。前作『リメディア』を観た人なら、彼の言葉の意味がよくわかるだろう。大道具・小道具の細かな仕掛けと、とてつもないこだわりの集積。目を凝らして何度も見たくなるのが、カミーユの作品なのだ。

今回の作品には、日本人のアーティストやクリエーターも登場する。その一人、笙奏者の井原季子は、カミーユが「本能的な感覚を持つ」と評し、綿密に書き込まれたこの舞台で唯一、柔軟で即興的な要素を担う。デザイナーの青木淳は、技術者かつ表現者として、作品の重要な仕掛けや技術を担当しながら、舞台上に幾度も登場する。

これまで何度となく日本を訪れているカミーユ。「あからさまに表現されてはいないけれど、旅の途中でみた光と影、人々のリズム、はにかみなど、様々な日本が織り込まれているんだよ」。

カミーユ自身が「これまでにないほど正確に台本に書き込んだ、まるで小さなオペラ」と呼ぶ作品『MA―間』は更に磨き上げられていくことだろう。その本番に立ち会うまで、待ちきれない!

文:田中未知子(瀬戸内サーカスファクトリー代表/アーティスティックディレクター)

9月下旬
詳細はP14、HPへ
シアターイースト
振付・演出・出演:カミーユ・ボワテル
出演:セヴ・ベルナール 井原季子 ほか

カミーユ・ボワテル

「自作自演」〈第16回〉芸劇+トーク 異世代作家リーディング

8月2日(木) 16:00開演 シアターイースト
詳細はP11へ

永井愛　長田育恵

世代の異なる作家が自作を読み、語り合う

2011年より不定期で開催している人気企画。世代の異なる2人の作家が、それぞれ自作の短編小説・エッセイなどを読み、その後に互いの言葉を聞いて感じたことを語り合う、2部構成で上演。作家が自らの声で届ける朗読は圧巻。

16回目の今回は、劇作家の女性二人が登場し、ぞれの戯曲を取り上げます。作家の世界観を共有し、作品の新たな魅力に出会える贅沢なひと時をお楽しみください。

出演:永井愛　長田育恵　　トーク聞き手:徳永京子
朗読作品:永井愛「ザ・空気」より　長田育恵「神舞の庭」より

ハイバイ15周年記念同時上演 「て」「夫婦」

8月18日(土)～9月2日(日) シアターイースト 詳細はP12へ

8月23日(木)～9月2日(日) シアターウエスト 詳細はP12へ

家族という理不尽を2作、同時上演

人気劇団ハイバイが結成15年を記念し、シアターイーストとウエストで代表作2作を同時上演。イーストの『て』は、家族が壮絶な喧嘩をしている部屋で静かに息を引き取った祖母の死を中間点に、その前と後の一家のわずかな変化を描いた物語。『夫婦』は、『て』一家の暴君だった父が、職場では慕われていたこと、苦しみながらも母が離婚しなかった理由、尽くしたはずの医療に裏切られた皮肉を、父を憎んでいた息子がたどる物語。どちらも作・演出の岩井秀人の実体験から生まれた作品だが、そんな経験のない人さえ「これは私の家族の物語」と感じる切実さと間抜けさが全編に漂う。『て』の母親役に浅野和之、『夫婦』の母親役に山内圭哉というキャスティングも魅力的だが、『夫婦』の父親役を岩井自ら演じるのが最大の見どころだろう。強く結ばれた2作、どちらも観たい。

文:徳永京子

作・演出:岩井秀人
「て」　出演:浅野和之 平原テツ 田村健太郎 安藤聖 岩瀬亮 長友郁真
今井隆文 能島瑞穂 湯川ひな 佐野剛 松尾英太郎 猪股俊明
「夫婦」出演:山内圭哉 菅原永二 川上友里 遊屋慎太郎 瀬戸さおり 渡邊雅廣 八木光太郎 岩井秀人

グループる・ばる「蜜柑とユウウツ ～茨木のり子異聞～」

9月13日(木)～23日(日・祝) シアターイースト 詳細はP14へ

撮影 宮川舞子

待望の再演で、有終の美を飾る

コメディもシリアスも力みなく説得力を持たせる演技で、数々の舞台、映像で引っ張りだこの松金よね子、岡本麗、田岡美也子。この3人が32年前、「等身大の女性を演じたい」と演劇ユニットを立ち上げた。作家も演出家も自分たちで決めて声をかける俳優発信の企画の、いわば走りだった。そのグループる・ばるが活動に終止符を打つ。最後に選んだのは、3年前、同じシアターイーストで上演した『蜜柑とユウウツ～茨木のり子異聞～』。「わたしが一番きれいだったとき」で知られる詩人・茨木のり子の生涯を、気鋭の長田育恵が執筆、マキノノゾミが演出した作品だ。上演中から高い評価を得、長田はこの作品で鶴屋南北戯曲賞を受賞した。これをさらに練り上げ、芸劇をスタート地点にして全国ツアーを敢行する。木野花や小林隆ら初演組も脇を固め、さらに多くの大人の胸に染みる公演となるだろう。

文:徳永京子

作:長田育恵(てがみ座)　演出:マキノノゾミ
出演:松金よね子 岡本麗 田岡美也子 木野花 小林隆 小嶋尚樹 古屋隆太(青年団)

チケット発売:8月1日(水)

COMING UP NEXT　2018.10－12

演劇・ダンス ラインナップ

10月8日(月・祝)～21日(日)
「ゲゲゲの先生へ」プレイハウス

原案:水木しげる　脚本・演出:前川知大
出演:佐々木蔵之介 松雪泰子 白石加代子 ほか

チケット発売:8月4日(土)

佐々木蔵之介

11月下旬
芸劇dance
田中泯 ソロダンス
シアターイースト

田中泯

Photo:Hayato Araki

12月1日(土)・2日(日)・4日(火) ＊3日(月)休演
芸劇dance 勅使川原三郎
シェーンベルク
「月に憑かれたピエロ」
プレイハウス

勅使川原三郎

photo by Akihito Abe

演出・振付・照明・美術・衣装:勅使川原三郎
出演:勅使川原三郎 佐東利穂子
マリアンヌ・プスール(歌)　ほか